

【第1節】 文武両道の真髓

現代の日本において、おそらく誰もが認めている美徳の第一は、「優しさ」ということではないでしょうか。優しさの思想は、もちろん平和憲法下の戦後文化の、大きな収穫であったことは間違いありません。しかしながら、優しさがあまりにも突出したものとなるとき、それはどこか正体不明の柔弱にめうじやくへと陥ってしまうようにも思われます。

そもそも優しさは、古くから日本人の価値観の柱となってきたものです。しかし、それは常に、強さとセットになって、相補う徳として理解されてきたのであります。「強くて優しい」は、古来、理想の人格を一言であらわす最大公約的な概念でありました。

武士が理想とした「文武両道」も、実はこの「強くて優しい」をいいかえたものにほかなりません。強さと優しさは比例するというのが、文武両道の基本公式だったのです。この公式の中身を考えてみたいと思います。

▼ あわれを知る武士

スポーツに励み、受験も頑張る。前節では、そういう今日広まっている文武両道のイメージを、いったんカッコに括っておきました。本当のところをいえば、そうした今日のイメージは全くの誤解であるというのが、これから申し上げることの主題であります。

「武は暗のわざ」のところ(二〇八頁)で述べましたように、文と武とは、本来、天に由来し、天子が一身に体现すべき、二にして一の徳であります。武はいうまでもなく、戦闘にかかわる「武勇」であり、文は、人々の和合や秩序にかかわる「礼楽」に相当するものであります。

「礼楽」は、一言でいえば、道徳と芸術、すなわち人間の精神や情操に働きかけるものを指します。そうして、わが国の伝統では、天子(天皇)に帰属する両者のうち、「武」を武家が、「文」を公家がそれぞれ分担して継承していくものとされてきました。

文武の「文」は、わが国においては、端的にはお公家さんたちの仕事である優雅なわざ、詩歌管弦を指しております。歌を詠み、楽器を奏でる。それが、わが国本来の「文」のイメージだったのである。しかも、詩歌管弦のわざとしての文と、戦闘者の働きとしての武とは、本来一体のものであるという観念は、これまた武士の世界に根強く受け継がれてまいりました。そして、この両者を兼ね備えた武士が、古くは「あわれを知る武士」と呼ばれて、理想の存在と仰がれてきたのでした。

もちろん、戦闘者たる武士の理想は、あくまでも戦いに勝つ強い武士であります。このことと、お公家さんの優雅さとは一見矛盾するようではありますが、しかし、丸山眞男もいうように(『丸

山眞男講義録』第五冊、一九九頁）、武士たちは必ずしもそれが「弓矢の道」に反するものとは考えていませんでした。「昔は源平の武士、皆管弦に通じたり」（『集義外書』巻一）と熊沢蕃山も述べておりますように、血なまぐさい生活を送っていた往時の荒武者たちは、学問的教養こそなかったとはいえ、皆詩歌管弦のわざをよくしたものでした。

源義経が五条の橋で笛を吹いていたのは伝説の部類かもしれませんが、一谷合戦で討ち死にした平敦盛が笛の名手であったのは確かですし、平家きつての猛将平忠度が和歌の名人（『千載集』などいくつかの勅撰集に入集していますし、個人歌集も伝わっています）であったのは有名な話です。何よりも、清和源氏の伝説的英雄、八幡太郎義家が和歌をよくしたことは、第二章でも触れた通りです。

周知の通り、八幡太郎は、清和源氏史上最強を謳うたわれる武士であります。蝦夷の武将安倍貞任あべのさだとうに「衣のたてはほころびにけり」と詠うたいかけ、貞任が「年をへし糸の乱れの苦しさに」と応じたやりとり（『古今著聞集』）などから、「やさしき」武士のイメージがある一方で、都の人々からは「おなじき源氏と申せども、八幡太郎はおそろしや」（『梁塵秘抄』）と恐れられた人物でありました。

鬼神のごとく恐れられた武士と、優雅な歌のわざとは、どこことなくしっくりこないような印象があるかもしれません。しかしながら、武士としての強さと、「やさしき」わざとは、矛盾なく一つであるはずだという観念を武士たちがもっていたのは、たぶん間違いないことのように思われます。

▼断念が引き出す実力

詩歌管弦のような優雅なわざと、幾多の合戦を勝ち抜いていった強さとは、一体どのように結びつくのでしょうか。

武士たちは、長い合戦の経験の中から、強さを導き出すさまざまな条件を発見してきました。腕力、武芸といった肉体的な強さは、もちろんその一つです。しかしながら、ルールの限定されたゲームとは違って、自身や一族の生命・財産を賭した戦いを勝ち抜く力は、決してそれだけにとどまるものではありません。

武士の実力とは、腕力・武芸はもちろん、知識・才覚・財産・家族・肩書から、容貌・性格、では運勢まで、およそ自己の持てるあらゆるものを総合した力のことであります。そうして、最も肝心なことは、そうした己れの持つ力を、いざ戦いのその時に、余すことなく発揮できるということです。発揮されない実力は、現実の力（つまり「実力」）とは呼べないからです。

ですから武士たちは、さまざまな実力を身につけ蓄えること以上に、いざという時にいかにして持てる力を余すことなく出し尽くせるかということに気を配りました。そうして、武士たちが発見した最大公約的な答えは、たとえば『葉隠』のあの有名な一節に端的にあらわされております。

武士道と云は、死ぬ事と見つけたり。二つ／＼の場にて、早く死ぬ方に片付ばかり也。別に

子細なし。胸すわつて進む也。(中略)是が武道の丈夫也。毎朝毎夕、改めては死々、常往死身に成て居る時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕課すべき也。(聞書一―二)

この一節は、よく誤解されていますが、別にただ命を捨てろといっているわけではありません。「武道に自由」を得た最強の武士(「武道の丈夫」)になるためにはどうすればよいかが説かれているのです。『葉隠』はその要諦を、「断念」にあると主張しているのです。「二つ／＼の場」とは、いざ刀を抜くぎりぎりの場面です。いざ戦いのその時には、生を断念して死に突入せよ。そうすれば恐れる何ものもなく、「胸すわつて進む」ことができるのだ、と説いているのです。

「死兵」ほど恐ろしいものはないというのは、およそ戦闘者の世界の常識でありましょう。死を決して突進してくる者が最も恐ろしいということは、裏返していえば、戦闘者の実力が最大限發揮されるのは、あらゆるもの(生命、財産、家族など)を断念した時だということでもあります。実力は、己れの愛するもの、執着するもの(その代表が自分の命でしょう)を断念することによってこそ、余すことなく發揮されるということです。

▼強さと優しさは比例する

ところで、断念が断念であるためには、捨てられ諦められたものが、自分にとって大切なもので